

Trial & Error

No.237

March-April 2004



特集

カンボジアの 村でJVCが してきたこと

— 持続的農業と
農村開発 (SARD) の10年 —

〈カンボジア〉村の人々とともに歩んだ10年

〈プロジェクトの現場から〉

アフガニスタン／ラオス

〈報告〉

調整員補佐・中島謙一郎の **イラク滞在記**

カンボジアの村で JVC がしてきたこと

— 持続的農業と農村開発 (SARD) の10年 —

激しかった内戦の余瀾^{よじん}が色濃く残る 1994 年、JVC はカンボジアの村に入った。農業も農民の暮らしも村そのものも、大きな痛手を受けていた。その中で、村人自らがしっかりした農業と暮らしをつくりあげるにはどうしたらいいのかをともに手探りして、10 年が経った。村人と歩いた 10 年が、何を生み、どんな課題を残したのか。最近現地で行なったプロジェクト評価の手法も含めて報告する。(編集部)

カンボジアの村で探った もうひとつの農業と暮らし

前カンボジア事務所農村開発担当 余部 徹

■支援する側、される側

自然条件に恵まれ、アジアで唯一「飢えを知らない国」といわれたカンボジアが、戦火に巻き込まれ、世界でも最も困窮した国に数えられるようになってから、早くも四半世紀が経とうとしている。

和平が実現し、過去の紛争地として忘れ去られようとしている感もあるが、果たして人々の暮らしは脅威から解放されたのだろうか。答えは否である。むしろ等しく貧しかった時代よりも、貧富の格差が広がった現在のほうがリスクは高まっているという意見もある。

JVC の農村での活動は、この十年余り、一つの地域に張りついで、農村に暮らす人々が直面するさまざまな困難を目的に立ち向かうとき、NGO として解決してあげるのはなく、どうすれば人々自身で解決に近づくことができるのかを一緒に考え、試行錯誤してきた。

私が五年前に赴任したとき、複数のカンボジア人に「カンボジアの印象はどうですか」ではなく、「カンボ

ジアはダメでしょう」といったニョアンスで第一印象を聞かれ、とても違和感を覚えた。その言葉の前に「あなたの国に比べたら」というフレーズが隠されていると感じたからだろう。国境を超えて支援する側とされる側は、このような関係から抜け出すことができないのだろうか、NGO に問いかけられているのはまさにこの点ではないかと思う。

■変化する「村の問題」

NGO が自らの活動を評価する^{※注①}ときも、どれだけ支援を投入してきたか、どれだけそれが役に立っているかを見るだけでなく、その活動が地域の人々の暮らしや意識にどんな意味を持つのかということに最も注目しなければならぬと思う。当事者以外の人間が評価活動をするということは客観性を保つためには重要だが、短期間でその地域のことを良く知らない人間だけではそこまで見ることはできない。

昨年十一月に行なった SARD^{※注②}プロジェクト評価でもこの点を踏まえ、活動の中心を担ってきたカンボジア人スタッフと活動地域の住民ができるだけ評価の主体となるように進めた。その結果、今までなんとなくわかっていただけの認識でできていなかったことや、思いがけずわかったことがいくつもあつた。例えば、活動当初からの課題であ

る水や食糧の問題に関しては、状況はかなり改善してきているとはいえず依然として生活上の最大の心配事であるということがわかってきた。その関心も、量的な要素だけではなく、化学物質への不安など、より質的な要素が加わってきていることが読み取れた。JVC と関わりの深い村ほどその傾向は強い。われわれの主張がある程度受け入れられ、定着してきているともいえる。

ここ数年カンボジアの農村では、直接生活に響く身近な環境の劣化や、公共地の私有化が確実に進んでいる。それに伴って、JVC の活動地でもヤシ砂糖づくりのような地場産業の衰退が始まっており、地域の人々が地元の資源を活用して行なえる代替的な地場産業の創出もしていかなければならない。さもなければ、JVC の活動地のように都市近郊であるがゆえに出稼ぎをすればしのげている地域では、地域共同体の結束は容易に緩んでいくことになるだろう。

また、悪質な農村金融の展開や、借金による土地の喪失も勢いを増しつつある。政府の方針をみても、農作物への有効な保護策もないままの WTO 加盟など、弱小農民は今後も相場や流通に振り回されることになるだろう。他のアジアの国が経てきたような、近代化に伴う農村の従属化・周辺化はカンボジアでも確実に進行しつつある。

※注① JVC では、通常 1 つの活動 (プロジェクト) の期間を 5 年間で設定し、活動終了時にその評価を行なっている。
 ※注② SARD = Sustainable Agriculture and Rural Development、一般的に「持続的農業と農村開発」と訳される。

持続的農業



たい肥・緑肥づくり



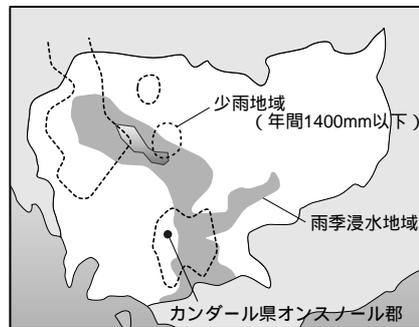
果樹菜園トレーニング

農村開発

牛銀行



主な活動



活動地

JVCのSARDプロジェクト活動地であるカンダール県オンスノール郡は、年間降水量の少ない地域(1400mm以下)であり、かつメコン-トンレサップ水系の雨季浸水地域からも外れている。このことから、水の確保が非常に困難な地域であることがわかる。



女性相互扶助グループ



コメ銀行



井戸掘り

農村での活動

■だまされなかったための情報提供も

しかし、今のところ大多数の農民が小作化せずに、自作農として自分の土地を持ち最低限の投入資材でなんとか自立的に営農できるカンボジアでは、本格的な近代化やグリーンリゼーションの弊害はまだ現れていないといえる。これは現在の世界において貴重なことである。

その中で、将来予想される潜在的な脅威に対する環境教育や、持続的農業の普及など、SARDプロジェクトが取り組んできた予防的活動は、実感に基づいた共感を人々から得るのはなかなか難しい。村人にとって、遠くで森が切られることより明日の食いぐちに優先順位が置かれるのは至極当然のことである。

しかし意識化されているかいないかに関わらず、近代化やグリーンリゼーションの対案として位置づけられそうなく、つまり身近な資源を使っている村の外に依存しなくても安心して暮らしていけるようにするための取り組みは、数多く見いだされた。人々が代々受け継いできた生活の知恵や営農技術、JVCが提案し参加者を得た新たな活動などが、他の多くの農民にも紹介され実践されてきた。NGOなど外部からの関わりがあるほうが、それまで当たり前に行なわれてきたそのような取り組みを再発見したりその意味を理解しやすい

のかもしれない。

例えば、JVCの活動地の農民に稲作で害虫の被害に遭ったことがあるか聞くと、ほとんどの人が無いと答える。これは害虫と益虫とのバランスが取れているからだ。このことは、反当り収量を追い求めるあまりに害虫とのいたちごっこを続ける近代農業に重大な示唆を与えている。

また、女性相互扶助グループの活動はJVCの側がデザインした活動だが、女性十人前後でグループを作り貯蓄をして、参加メンバーは小規模事業のためにそこから資金を借りることが出来る。各メンバーがグループに返済する利子がすべてグループのものとなるため、村からお金が流れ出すのを防ぐ有効な手段となっている。

農業を売る人はメリットしか言わないし、金貸しは結局村の外にお金を持ち出すために来るのだ。彼らにだまされないような情報提供や仕組みを考え提案するのも、NGOの重要な役割であると考えられる。

■持続する暮らしと農業に向けて

SARDプロジェクトの活動が今の形で始まった九三年から九四年にかけて、JVCは、日本の対カンボジア食糧増産援助に必要な以上の農業供与が含まれていることに対して、現地状況を無視した暴挙として反対キャンペーンを展開した。結局、

外務省は農業の供与は取りやめることとなったが、以降、農業・化学肥料の使用を前提とした近代農業ではない「もうひとつの道」を探るJVCの長い道のりが始まった。

今も試行錯誤は続くが、たい肥や緑肥の利用、選抜伝統種の活用などから増収の成果も徐々に現れ始めている。あわせて、家庭菜園の普及による食費の軽減と栄養改善など、多くの作物を組み合わせて、耕地全体としての生産性が向上するような持続的農業の普及が行なっている。

そしてこれから、JVCがこの活動をまとめ上げていくフェーズと位置づける次の五年間が始まる。環境的にも社会的にも持続可能な方法による農業・農村開発を、農民同士の組織化や集落同士の連携による自然資源管理などを支援することを通して、地域に面的に定着させていくことが求められるだろう。それが実現したときに、この取り組みは、他の地域に波及させていくための一つの農村開発のモデルとなり得るかもしれない。

確かな技術に裏打ちされた、理念に実利が伴った形の取り組みを支援することで、活動地域の人々とNGOが、お互い物質的にあまり行き来がなくても困難を乗り越えていけるような協力関係が続けられるのではないだろうか。



活動の10年間を振り返って

答えた人：カンボジア事務所 SARD コーディネーター

チャン・ナリン

「自分たちでできる」と気づいた

Q 今回のプロジェクト評価を踏まえて、どのような成果を果たすことができましたか？

A まず始めに断っておきたいのは、プロジェクトの成果というのは、JVCが成し遂げた成果ではなく、村人たちが成し遂げた成果だということです。その点も含めて、村人たちはNGOとは何か？という点を少しずつ理解してくれるようになってきました。つまり、NGOは支援してくれる人たちということではなく、共に働く良きパートナーである、と。そして、実際に村人たちが自身がSARDの活動を通して、様々なことが自分たちでできることを発見できたのではないかと思います。

また、評価での村人へのインタビュー結果にもありますが、水や食糧の確保という点ではかなりの改善が見られたと思います。特にコメ銀行、女性相互扶助グループに参加している家庭では、全く参加していない家庭に比べると生活状況の改善が進んでいます。さらに、そうした活動に参加することでいろいろなことを学んだり、人々と会って話をしたりと貴重な経験を得ているのではないかと思います。こうした活動は今後も継続されるでしょう。

村人の不安は、自然・収穫・病気

Q 成し遂げられなかったこと、これからの課題は？

A 村人は依然として将来に不安を抱えています。その理由として環境の変化があげられます。カンボジアでは「農業とは自然である」といってもいいと思いますが、その自然が失われてゆき、結果として干ばつや洪水が起り、農業を不安定にしています。私が見ている限りでは、SARDプロジェクトの成果もあり、干ばつなどで一年間全く米が獲れないという状況になっても、コメ銀行を利用したり、果樹や野菜、魚などを食べたり売ったりしてなんとか農民は生活できます。しかし、もし二年続けて米が獲れない状況になると多くの農民が困窮するだろうと思います。

カンボジア事務所 農村開発担当 山崎 勝

生活の変化

■水・衛生状況はよくなった… 95%

SARDプロジェクトは「病人を出さない村づくり」を目指し、安全な水・食糧の確保に重点をおいて活動を行ってきた。村人へのインタビューでは、水や衛生状況については九五%の人が、食糧についても約七割の人が「十年前と比べて状況は改善した」と回答した。

また、他のNGOや国際機関、政府間の援助などにより学校や病院、道路の建設も徐々に進み、プノンペン近郊では縫製工場等の建設も進むなかで農業以外の就業機会も増加している。

一方で、こうした経済発展は農村部での自給自足的な生活に変化をもたらしている。例えば、病院へ行ったり薬を買ったりできるようになった一方で、医療支出の増加が大きな負担となっている農民も多い。家族の一人の病気がきっかけで、ある日突然、借金生活に転落してしまうこともある。

■薪が入りしづらくなった… 92%

生活は安定してきているものの、森などの自然資源によって育まれてきた以前のような生活を続けることは難しくなっている（表一参照）。

自然資源として村で最も重要なのが木である。薪に関してみれば九二%の

人が、建築資材に関しても八九%の人が「入手は困難になった」と回答した。これは森林が減少したことを示している。このことが、村人が日常的に食用としてきた野草や家畜のえさの入手をも困難にしていることも伺えた。一方で、魚の収穫や家畜飼育のための水の確保については、「変わらない」「改善した」と答えた人が八割以上となった。JVCが井戸や池を掘り、養魚の支援を行ってきた成果とみることができ、森林資源が減少し、干ばつなどの異常気象が近年頻繁に発生するなかでは予断を許さない状況といえる。

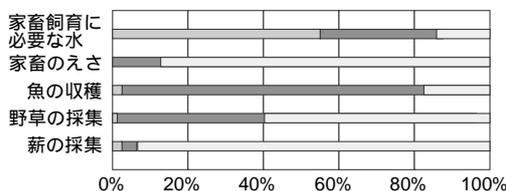
活動の成果

持続的農業

■土を良くすることが生産増に… 98%

JVCは、近代的な技術を取り入れることで厳しい環境を克服するのではなく、自然環境を回復し、人間と自然

表1：自然環境の変化（10年前と比較して）



□容易になった ■変わらない □困難になった ■わからない



もうひとつ農民が心配していることは健康についてです。日常の生活は改善してきているものの、医療費が高くなってきていることから、家族の誰かが病気をすると一年分の米の収穫が全て医療費として消えてしまうこともありえます。それに干ばつなどが重なる、農民は借金生活を余儀なくされてしまうわけです。また、最近では、これまでになかったような新しい病気が見られるようになってきました。こうした病気の多くは、より高度な医療技術や高価な治療薬を必要とするため、農家の家計を圧迫しています。

私はこれまでの活動を通して、「NGOの仕事とは人々の不安や恐怖を取り除くことである」と強く感じるようになりました。そのためにも、今後も生活や健康に対する不安を取り除く努力を村の人々と共に続けていかなくてはなりません。また、やはり同じように政府も、人々の不安を取り除くために政府として努力すべきだと思います。

取り残される人を出さないように

Q 今後のJVCの役割について、どう考えていますか？

A 今後も水や食糧という生活の基本部分についての活動はまだまだ続けていかなくてはならないと思います。ただ、全ての人が一方の発展を目指すのではなく、それぞれのやり方を自分たちで選んで生活を良くしていけるよう、JVCとしては農業面においても生活面においてもいろいろな方法を提示していくことが大切です。与えられたものをただ受け入れるのではなく、自ら選ぶことによって、外部に依存してなくても生活していける能力を一人一人の農民が身につけなくてはなりません。

その際にJVCが注意しなくてはならないことは、ある特定の個人だけを対象にしてしまわないことです。「コミュニティ」全体を対象としてアプローチすることによって、村で経済的に貧しい人も参加できる雰囲気をつくらなくてはなりません。なぜならば、個人が変化していくと同時に社会も変化していくからです。社会が変化しているのにそこに参加できない人がいれば、それらの人々は取り残され

村人はJVCの活動をどう見ているか

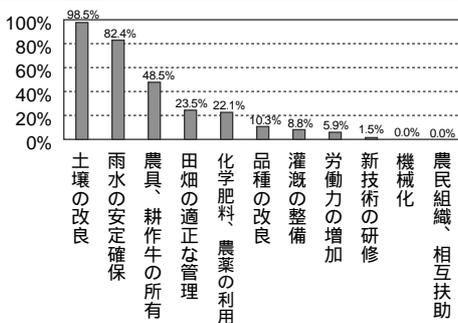
村人へのインタビュー

の調和が取れた農業を目指して努力を続けてきた。農民たちはそうしたJVCの取り組みについてどう感じているのだろうか。

JVCの農業トレーニングに参加したことのある農民に聞いたところ、九八%の人が土を良くする事が農業生産の向上には欠かせないと回答した(表二参照)。JVCは土づくりの重要性について農民と共に試行錯誤を繰り返してきたが、農民の実践の中でもこれが実証されたといえる。

一方で、品種の改良、灌漑の整備、新しい技術、機械化などと答えた農民はあまり多くなかった。近年、農業技術の近代化によって食糧を増産しようという動きがカンボジア国内でも見られる。しかし、農民の実感として、農業の近代化が必ずしも「豊かな」生活をもたらすとは限らないということを感じているようだ。

表2：農業生産の向上に必要なものは？



牛銀行

■労働提供から解放された：75%

耕作牛は農家にとって必需品である。しかし、牛一頭の値段は一般の農家の年収あるいはそれ以上することもあり、牛を所有することができない家庭もある。こうした家庭では牛を借りなくてはならない。

牛を借りた場合には、対価として田植えを手伝うなど労働提供を行なうのが一般的である。ただ、自分の田んぼの田植えなどでも忙しい時期に、他の家の田植えを手伝うことは大変な負担となる。牛銀行から牛を得た農民に質問したところ、七五%の農民が「労働提供を行わなくてよくなった」ことを牛銀行の利点として評価した。また、牛を借りることは、他人に頼っていると劣等感を生み出してしまう。自分の牛を所有することでその劣等感から解放されるといっても牛銀行の人気の秘密であると考えられる。

また、ほとんどの農民が牛銀行の利点としてあげたのが、牛糞を確保できるということであった。牛糞の利用は持続的農業には欠かせず、痩せた土地を豊かな大地に変えようとする農民の強い意欲が感じられる。

女性相互扶助グループ

■高利貸しからの借金：70件↓23件

近年、カンボジアの農村では農村金



てしまいます。これが貧困を生み出す大きな原因です。この点に注意を払って活動を行わなければなりません。こうした点はSARDの活動の中だけの問題ではなく、アドボカシー（政策提言）というような形で広くカンボジア社会に目を配り、注意を促していかなくてはならないと思います。

選択して決めるのは村人自身

最後に、今後の抱負を聞かせてください。

A SARDの十年間の活動を通して、JVCも多くのことを学ぶことができました。今後はこれまでの経験を活かして、他の地域や他の分野での活動に挑戦してみてもよいのではないかと思います。特に村人との関係構築という点において、JVCは多くの素晴らしい経験を蓄積できました。つまり、村人がJVCに頼るのではなく、パートナーとして働くということの大切さをJVCは学ぶことができましたのではないかと思います。村人と対等なパートナーとして働くことは、どんなNGOのプロジェクトにおいても重要で、いろいろなところでこの経験を活かせるのではないかと思います。

最後に、これまで長年にわたりこの仕事に携わってきて感じていることは、村人の将来に関するあらゆる判断は、村人自身によって行なわれなくてはならない、ということです。その意味では、JVCの役割は限られているのかもしれないませんが、これまでのJVCの経験をより多くの人に伝えることによって、村人たちがより多くの選択肢を持つように協力することが大切です。

私自身もカンボジアの人々が不安や恐怖から解放され自由に生きていくことができる公正な社会の実現に向けて努力していきたいと思っています。

融が急速に広がっており、農民が土地などを担保に借金をするケースが増加している。その結果、土地や耕作牛などを手放さなければならなくなった農民も見られるようになってきた。

これに対して、JVCでは貯蓄を奨励し、女性相互扶助グループ(MAG)活動を支援している。MAGでは自分たちで貯蓄したお金を元手にグループ内で貸し借りするという試みを行っている。参加している四十六世帯の女性に質問したところ、MAG参加以前は高利貸しや農村金融から借金をしたというケースが七十件あったのに対し、MAG参加後は二十三件へと激減していることがわかった。中でも高利貸しからの借金はわずか一件だった。

しかし、なぜ農民は借金をしなければならぬのだろうか？ 多くのMAGでは緊急用に無利子で貸し出せる基金を設けている。そこで、どんな場合にお金を借りたのかを聞いてみた。その結果、ほとんどが病気の治療、葬儀、出産、季節行事などへの出費に利用されていることがわかった。MAGの基

金ではいつでも必要な時にお金を借りることができる。こうした仕組みをつくることで、村の人々が協力しあい、限られた資金を効率的に利用できることが明らかになった。

農民の意識

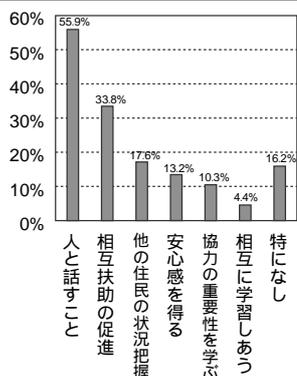
■話しあい、助けあいが生まれる

JVCがこのプロジェクトで目指しているのは、村の人々が村の問題を自分たちの力で解決できるようにすることである。そのため、人々が集まり話しあう場所を提供できるように心がけてきた。そこで最後に人が集まることの利点を聞いてみた(表三参照)。

回答として最も多かったのが「人と話ができること」、それに続いて「相互扶助が生まれる」、「協力の重要性を学ぶことができる」ということである。私たちの期待に反して「お互いに学びあえること」はわずか四%にとどまり、「特になし」も一六%に上った。

この結果から、全体として、まずは自分の家庭の生活をしっかりさせたいという農民の現状を読み取ることができる。しかし、人と話ができることをメリットとして受け取っている農民は半数以上になっており、これがきっかけとなり農民の協力関係がさらに促進することを期待したい。

表3：人が集まることの利点は？



どうプロジェクト評価を進めたか

カンボジア事務所代表 米倉雪子

※注① OECD= 経済協力開発機構、DAC= 開発援助委員会
※注② 妥当性 (relevance)、有効性 (effectiveness)、効率性 (efficiency)、
長期的な波及効果 (impact)、自立発展性 (sustainability)
※注③ 参考文献：『国際協力プロジェクト評価』 編・NPO 法人アークス、
発行・国際協力ジャーナル社、2003年

■何をどう評価するか

今回のSARDプロジェクト評価は、JVC内部の「プロジェクト運営に関する基準」をもとに、国際協力プロジェクトの評価手法、プロジェクトサイクルマネージメント(PCM)の考え方、OECD・DAC^{※注①}推奨の評価基準五項目^{※注②}などを参考にしている。^{※注③}

今回の評価の目的は、本プロジェクトの過去五年を振り返り(第二フェーズ終了時評価)、目標達成度と成果を確認すると同時に、過去十年の変化も併せて考察し、改善すべき点を把握して、現プロジェクトへのJVCによる関与を減らす時期と方法を検討するためであった。

また、本プロジェクトが、JVCとして本格的にSARD(=持続的農業と農村開発)に取り組んだ初めてのプロジェクトでもあることから、活動を通じて得られた「学び」をJVC内部で共有し、他国の事業でも活かせるようにすることも今回の評価の目的に含めた。さらに、その「学び」をJVCの外部と共有することも念頭においた。

より深く詳細に評価をするという理由から、評価実施者はJVC内部から選ぶことにした。ただし本プロジェクト実施者のみでは評価結果が偏る危険があったので、JVC東京事務所など国外から三人が評価に参

加した。その一人は本プロジェクト立ち上げに関わり、当初のSARDの意義を知る人物なので、目標を達成できたかどうかの判断に有効であった。評価の実施時期は、農繁期^{※注④}を避け、米収穫前の十一月頃とした。

■村人に質問、成果を測る

活動地全五十村で調査はできないので、サンプルとして十一村を選ん

評価チームが現場に伝えて本プロジェクト全スタッフの合意を得た後、本プロジェクト全スタッフと現地代表が、プロジェクト目標の達成度を測るための質問項目を、SARD^{※注⑤}持続的農業とRD活動それぞれについて考えた。村人に質問をするSARDスタッフ自身と共に質問を考えたことで、全員が共通理解をもって村人に質問することができたと思われる。

質問案を村人に一度

試験的に質問し、わかりにくい点を訂正したのちに、村での本格的な質問を開始した。

■長期目標

農村地域と地域の人々の持続的な生計の保障

■プロジェクト目標

- ①農村での安定した食と生計の確保 (Livelihood Security)
- ②農民の主体的な参加による自治運営能力の向上 (Local Initiative)
- ③農村での自然資源の公正な管理と活用の実現に向けた能力の向上 (Natural Resource Management)

■評価手順

- ①評価方針の確定
- ②村人への質問項目の作成
- ③村人への質問・PRAの実施
- ④評価チームによる活動地の視察
- ⑤グループ活動リーダーおよびJVCによる討議
- ⑥評価結果のまとめ

誰にどのように質問をするかは活動ごとに異なり、SAについては個々の篤農家^{とくのあか}に質問をする形式で、RDのグループ活動についてはリーダーとメンバーそれぞれに訊いたり、女性相互扶助グループにはPRA(参加型農村調査)をしたり、村全般に関することも一村につき十世帯を無作為抽出してPRAを行なった。

サンプル数は全体の5%以上とし、男女の偏りも避けた。次期活動フェーズ中に、現活動地の活動をいっつどのように終息していくかのめどをつける予定なので、個々のRD活

動についての現実的な活動日程を、担当スタッフに村人と話し合せて考えてもらい、SARDチーム全体で吟味した。

■村人と結果確認、グループ討論

こうして、主に十一月に集めたデータ結果をふまえ、十一月末に評価チームがカンボジアのSARDプロジェクト地を実際に訪れた。プロジェクト地や活動を視察してこの十年の変化を実感してもらい、活動の妥当性を考える一助とした。同時に、グループ活動リーダーを全村から招いて、今回の評価で集めたデータをもとに本プロジェクトが達成したことを確認してもらった。その後、村人が現在脅威と感じていることや、どのようにその脅威にとりくむか、などをグループに分かれて討議し、発表してもらった。

結果として、評価五項目のうち、有効性、長期的な波及効果、自立発展性などについて知ることができた。目標設定と活動内容、活動プロセス、実施体制の妥当性については、プロジェクトを統括した日本人スタッフとSARDコーディネーターが振り返った。プロジェクトの効率については、例えば投入した資金額・人員数などに対して、どのような成果があがったかを定量的に表すのは極めて困難なため、定性的な評価にとどまった。

調整員補佐・中島謙一郎のイラク滞在記

12月26日から1月6日の20日間、調整員補佐としてイラク・バグダッドに滞在した中島謙一郎が帰国した。戦時下における生々しい体験とともに、明るくも逞しいイラクの人々の声をお届けする。



ホテルで感じる「日常」

毎日ヘリコプターがチグリス川上空を旋回し、ほぼ毎日どこかで銃声、爆発音がして、それに伴ってホテルの窓ガラスが振動する。やはり戦時下ということを感じずにはいられない。

一月十二日の夜、トイレに入っていた際に感じた『ズシン、ズシン』という体に響いてくる巨大な二回の音には、正直恐怖を感じた。直後に、滞在していたホテルに数センチ四方の金属片がガラス窓を突き破って飛び込んだことがわかったが、負傷者はなく、ほっとした。音の正体は、三百メートルほど離れているバグダッドホテルが砲撃されたときのものだということ、後日判明した。

戦争開始から現在に至るまで、「日常」としてこのような音を体感しなければいけないイラク人に、改めて同情する。

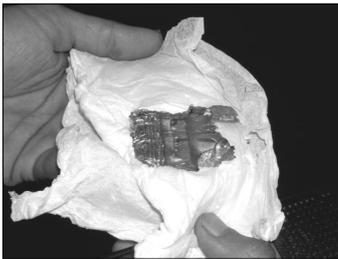
電気・ガソリン・物価

ホテルにいても一日に何度か停電する。ホテルのジェネレーターが稼動するまで数分かかるが、夜、風呂に入っている時に停電すると、真っ暗な浴槽の中で寂しくみじめな思いをする。

ガソリン不足は深刻で、ガソリンスタンドに連なる自動車の長蛇の列を目の当たりにする。イラクディナールの対米ドル比率も、およそ千五百イラクディナール/米ドルだったものが、数日後には千イラクディナール/米ドル(一月二十五日時点)と、劇的に変わったたりする。

日本の民間外交

中東地域に三年間滞在されている新聞社の方が話されたことには、中東地域の人の日本人に対する絶大な評価はゆるぎないものではないだろうか、ということだった。壊れにくい自動車などの突出した技術力や、八〇



■上：ホテルに飛び込んできた破片
■右：突き破られたガラス
(正面奥がバグダッドホテル)
■下：ウェイターの2人



また、ある日一緒に写真を撮影したホテルのレストランウェイター二人は、後日インターネットカフェにいる私に歩み寄り、自分たちのカメラで私を含

年代ごろにイラクで仕事をしてきた総合商社、建設会社などによる民間外交というのは、日本の誇るべきものではないか。その、今まで培ってきた厚い信頼が、「日本がイラクに兵隊を派遣するということなどにより非難を受けた」という滞在日本人からの話を聞くにつけ、今まさに壊されてしまうのではないかと恐れ、非常に残念で憤りさえ覚える。

友好的なイラク人

特筆すべきはイラク人の友好的な点である。私を気に入ってくれたのか、「愛している」とアラビア語で言うてくるホテル清掃係のハイディ氏(二十二歳・男性)は、外出時にボディガードとして同行してくれた。

む三人で写真を一枚撮影して、すぐ立ち去っていった。私のことを自分たちの記憶にとどめておきたいのだろうか、と感動した。

◎

全体的に悲観的な報告になってしまったが、病院では保健省配下の機関からの薬品供給が見られはじめ、シンドバッド子どもクラブの復旧作業も始まっている。明るい兆しが見えてきたことは大きな収穫である。

皆さまのご理解とご協力で今回無事に活動し終えたことに感謝するとともに、現在も引き続き現地地活動を続けているスタッフの無事を祈りたい。

二月初旬現在、JVCはイラクに原文次郎調整員を派遣しています。イラク全体としての復興の道筋は依然厳しいものであることに変わりありません。

そうしたなかで、外国NGOとしてイラクの人々に対して何が出来るのか、JVCは今後も現場からの視点を大切にしながら活動を続けていく予定です。

アフガニスタン アフガン流交渉術

はじめ
本間 一

の後の関係を有利に保つ、という日本の策略は通じない。たとえば贈り物だが、感謝すべきは徳を積む機会を与えられた送り主の側である。ここでは逆に接待を受けて貸しをつくり、相手に喜んでもらいながら雄弁を誘い、本音や核心部分の話を引き出すことで、より現実的な対策を導き出すことができる。

一年前、アフガニスタン東部のジャララバードに赴任して間もなく、この欄で「アフガン流買物術」を紹介させてもらったが、当時は、自尊心が強く打算的で、策略に長じているアラブ人と長く接してきた直後で、同じイスラム教徒でありながら、物腰がソフトで、バザールでも外国人だからといって値をつり上げたりしないアフガン人に、驚きと興味を持った時期だった。

今回は、現地スタッフの雇用管理やタクシーの値段交渉、県の局長との協議などを通じて会得したアフガニスタンでの「交渉のコツ」を紹介したい。ただし私は現地語を話せないのので、英語が出来る相手が通訳を介したケースを想定している。

《アフガン流交渉術・初級編》
①相手に貸しをつくり立場上そ

②初対面の相手の場合は、カタコトでも現地語で挨拶することから始める。話をじっくり聴きながら必ずジエスチャーを交えて応答する。やがて相手の表情に余裕が生まれ、笑いが起きればしめたもの。相手の誤解や不備を客観的に指摘し、自分の立場や主張を論理的に述べるチャンスとなる。

③交渉を次回に持ち越す勇氣と根気も必要。バザールでの値引き交渉同様、結論を急いだ方が不利である。また結論を出さなくても失礼にはあたらない。

以上、初級編。言うまでもなく、現在私は中級編の完成へ向けて、毎日アフガン人と渡り合いつつながら交渉力アップを模索している次第である。

アフガニスタン事務所・

現地調整員

message from the field



プロジェクトの現場から

写真：地域の人々と本音で向きあうために、アフガン流儀の修得にはげむ本間（中央）

ラオス

ビエンチャンの 光と影

名村 隆行

ビエンチャンが色めき立っている。目抜き通りであるランサーン通りに、昨年暮れあたりから、赤青黄色のきらびやかなイルミネーションが取りつけられた。建国記念日用の飾りかと思いきや、凱旋門、大統領官邸、その他の通りにも拡大しつつあり、不覚にも地元神戸のルミナリエを思い出してしまふほどの勢いがある。

ここ一年をみて、舗装道路の拡大、アールデコ調の街灯の設置、国際会議場の建設など、ビエンチャンは膨大な予算をかけて急激に「美しい」街に変化しつつある。今年にはラオスにとって勝負の年で、ASEAN観光フォーラムを皮切りに、メコン川委員会の事務所設置、議長国としてのASEAN会議の開催などが控えており、大きく

発展したラオスのイメージをアピールしておきたいという、ラオス政府の意気込みを、悪く言えば見栄っ張りぶりを感じる。ところがある日、街中を車で走っていて交差点にさしかかったとき、信号が赤でもなく青でもないことに気づいた。要は信号の電気がついてないのだ。そのまま進んでいいかどうかもわからない。交通整理の警官もいないために、我先にと突っ込んでいく車やバイクで、交差点は大混雑の様相を呈していた。「イルミネーションのために、電気代の節約で信号を消してるんじゃないだろうな」などと揶揄する声すら聞こえてくる。

そして、近年よく目につくのが、物乞い。九六年にラオスに来たときにはほとんど見かけなかったのだが、その数は間違いなく増加している。また、街中のある通りでは、売春婦が立っているのを見かけるようにすらなってきた。

きらびやかにみえるビエンチャンの光。光が輝きを増すにつれ、その影が色濃くなっていることに、本当に気づいているのだろうか。

（ラオス事務所代表）

村の生活改善をめざして ～草の根獣医の活動～

ハノイ事務所 伊熊 まゆ



ベトナムの農村の暮らし

ベトナムは八六年のドイモイ（刷新）政策以降、大きく変化しています。全体的な経済状況は良くなっている一方で、暮らしの中で現金のやりとりが占める割合が大きくなり、これが特に農村部の貧困層に非常に大きな影響を及ぼしています。

農村の生活改善に必要なこと

こうした状況の中、JVCでは、特に貧困の度合いが高い北部山岳地域のホアビン省^{※注①} タンラック郡内のムオン民族が住む五カ村（計三十八集落）において、人々の生活を改善するための活動を九九年から行なっています。

この村では、人々は天水に頼った農業を営み、主に米、トウモロコシ、キャッサバなどをつくっています。主な現金収入源はトウモロコシ（飼料用）などの農産物と畜産です。畜産は高収入が見込めると同時に、牛は貴重な労働力となります。畜産を振興することは、生活を改善するために重要な要素です。

家畜銀行と草の根獣医

生活改善活動の一つとして、JVCでは家畜を持たない農家を対象に家畜銀行を実施しています。家畜銀行とは、親牛・親豚を農家に貸し、子牛・子豚が生まれたら、そのうちの一定数を返してもらい、親牛・親豚とその後生まれた子牛・子豚は農家のものになる、という仕組みです。家畜銀行の管理は各集落の代表からなる、「村づくり委員会」が行なっています。

そして、その家畜を病気から守るために、集落ごとにボランティアの草の根獣医を養成し、病気の予防・早期発見・早期治療を行なうためのネットワーク



■草の根獣医養成研修の実習風景。研修は、予防接種を中心に行なわれた（写真は牛への注射の練習）。

表1：草の根獣医研修概要（1999-2003年度）

	対象地域	受講者数
1999年	タンラック郡内1村	13名
2000年	タンラック郡内のその他4村	19名
2001年	上記5村（フォローアップ研修）	16名
2002年	上記5村以外のタンラック郡内17村1町	166名
2003年	上記17村1町（フォローアップ研修） トウアンチャウ郡内1村	166名 11名

をつくっています。タンラック郡の獣医局と協同で行なっている草の根獣医研修は、九九年から現在まで続けられており、対象地域もJVCが家畜銀行の活動を実施している五カ村だけではなく、タンラック郡全体に広がっています。^{※注②}

草の根獣医の課題と今後

このように養成された各村の草の根獣医は、家畜の病気予防に貢献し、住民からも信頼されているという声を聞きます。しかし、診断を誤り家畜が死亡し

たケースや、草の根獣医の活動があまり活発でない地域もあります。この草の根獣医は、正式な獣医の長期養成課程を経ているわけではないために、その活動には限界があります。また、タンラック郡の獣医局とネットワークができれば、もつと活動が有効になるでしょう。

今後、JVCでは、
①草の根獣医の活動記録を充実させる

②ボランティアの草の根獣医と行政の獣医担当の情報交換・ネットワークづくり

③タンラック郡の獣医局スタッフの研修開催
などの取り組みを強化していきたいと計画しています。

※注① ベトナムの行政単位は、順に省、郡（社）（行政村）となっており、社は複数の集落からなっている。

※注② 草の根獣医制度はホアビン省獣医局より正式に認定されている。

このベトナム北部タンラック郡での草の根獣医活動は、宗教法人真如苑財団法人国際開発救済財団からの支援により展開しています。

スタッフのひとりごと

東京事務所で思い出す、モンゴルの強烈な冬。 カレンダー事務局 広瀬 哲子

「ここはね、冬は寒くて夏は暑いのに」
4月にJVCで勤務し始めたとき、何人かの人にそう言われました。なるほど確かにその通り。JVCの事務所では夏はほとんどエアコンをつけないので（これは大賛成）、パソコンのマウスが汗でしっとり…。一方、冬は底冷えのあまりコート姿で仕事をするスタッフが続出です。

「こんな寒さでめげてはならない」と思い出すのがモンゴルの冬です。私は一昨年の夏まで2年間、モンゴルで暮らしていました。モンゴルの冬は、すさまじい寒さです。マイナス30℃など当たり前。マイナス47℃を記録した日もありました。長い間外にいと徐々に感覚が…。寒いという

より、痛い。信号待ちなどしていると、あれれ、上まつげと下まつげが凍ってつながっちゃった！ 目が開かない！ なんてこともしばしばです。牛乳を買って帰ると、歩いている間にもちろん半凍り。凍りビールや凍りパンも味わいました。

寒いといえば、昔のモービル石油のCMを思い出しませんか？ パナナで釘を打ったり、凍ったバラをパラパラと紙吹雪のように飛ばしたりする、あの名CMです。あれは本当に実現するのか。とある冬の日、試してみました。マイナス30℃の屋外でパナナを寝かせること一晩。カチンカチンに凍ったパナナで釘を木に打ちつけてみると、すごい！ 釘はどん



イラスト／かじの倫子
*JVCにコタツはありません。

どんくい込んでいくではありませんか。これはなかなかの感動。憧れた冬の世界をやっと実現できました。

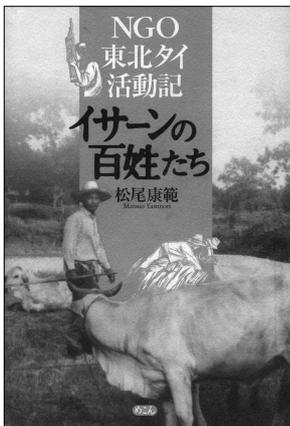
どんなに寒くても、とてつもなく青く高いモンゴルの冬空。現実ではないような真っ青な広がりの中に、ゆっくりと伸びていく飛行機雲。シンプルな美しさが、毎日の寒さを和らげてくれました。

上野の冬も、もっとゆっくり見渡してみればきれいな発見があるのかもしれません。今度早起きして、上野公園にでも行ってみようかな。

イラスト／かじの倫子

『イサンの百姓たち —— NGO 東北タイ活動記』

みるよむきく



文・松尾康範 めこん刊 1600円+税

「イサンの百姓たち——NGO 東北タイ活動記」を読むと、ウエアートーン政策もAFTAも、タイの農民や百姓たちにとってはあまりありがたくな

「タクシン首相に見習え」
そんな言葉が昨年のWTOカンクン会議前後から日本のマスメディアで見られるようになった。AFTA交渉に積極的なタイの首相を、構造的経済停滞から抜け出すために日本も見習うたらどうかという論調の中である。

しかし、タイの人々には何が起きているのか。タクシン政権は三十パーツ医療の提供や土地なし農民への耕作地付与など、自ら「ウエアートーン」(「惜しまぬ扶助」と命名した政策を打ち出し、底辺層からの支持が厚いという報道が多いが、本当にそうなのだろうか。

「イサンの百姓たち——NGO 東北タイ活動記」を読むと、ウエアートーン政策もAFTAも、タイの農民や百姓たちにとってはあまりありがたくな

いもの、かえって迷惑なもの、ということがわかってくる。

それは、タイの百姓たちはタクシンが持ち出すずっと以前からウエアートーンの仕組みを持っており、それが弱められてしまったのは他ならぬ政府の開発優先政策のためなのだという彼らの認識が、自分たちの言葉でこの本にはっきりと語られているからだ。そして、それを取り戻すには、AFTAに乗ってジャスミン米やドリアンを遠くの誰かに食べてもらう必要はなく、以前の仕組みのねじを少しまき直し、身の回りにいる人々とつながることだけで充分なのだということを、朝市プロジェクトなどの新しい活動の中で彼らが示しているからである。

自立を模索するタイの百姓の前にはさまざまな問題が出現する。会議で話しても結論の出ない話題は酒席へもつれこむのが常だ。著者がイサンの人々からゲーオ(グラス)というあだ名を冠されたのは、そこまでとことん付き合ひ、首を突っ込んだからである。新しいかたちのNGO活動記だ。

(ジャーナリスト 岡本和之)

《開発協力》

THAILAND

タイ

地場の市場づくり

一月六〜七日に隣のカラシン県で農業に関する集まりがあり、プロジェクト地の農民代表も参加した。スリン県では直売市場、カラシン県では町の生ゴミのたい肥化事業、JVCのプロジェクト地からは村と町の市場が発表された。無農薬・有機栽培、および複合農業を基礎に、町の消費者と生産者が直接つながりあう新しい試みが各地で始まっていることが印象的だった。(倉川)

農村で学ぶインターンシップ

九期生四名(女性二名、男性二名)がノンジョク自然農園での六週間の農作業&タイ語研修、続いて東北タイの状況についてのオリエンテーションを終えた。タイに来て既に八カ月になる八期生も呼び、双方の交流も行った。新インターンにこれまで学んだことを引きついでいけるよう、両者の意見交換の機会を増やしていこうと考えている。(森本)

CAMBODIA

カンボジア

持続的農業と農村開発(SARD)

今年の米の収穫はまずまずで、コム銀行には貸し出しきれずに余剰米が出たところもあった。一月に入ってヤシ砂糖づくりが行なわれているが、森林の減少で必要な薪が手に入りにくく、また砂糖の価格も下がっているため、砂糖づくりを諦める農家が出ている。それに代わる収入源として、不発弾などを掘り返し、鉄くずとして売却する農家が増えているが、事故で負傷者が出たため、不発弾教育の実施を計画している。(山崎)

資料・情報センター(TRC)

事務所を引っ越してプノンペンの中心部に移動したが好評、新規利用者も増加傾向にある。農業大学の学生からは、農業の概論だけではなく各作物についての詳しい書物の要望もある。最近では環境破壊などに興味のある学生が増えている。(山崎)

技術学校

プノンペン校は人気があり、聴講生が三十人、正規生と合わせて現在の生徒数は百十四人。その四割が寮生だ。実習室と図書室を含む新校舎が完成したが、土地を政府から借りている

同校に対し、ある企業がカンボジア政府首脳に学校移転をせまっており、移転阻止の交渉を続けている。(米倉)

調査研究・政策提言

漁業共同体運営に関する教本を一月末までに仕上げるため編集作業を進めている。漁業共同体が直面する問題の調査をカンボジアNGOのCEDACと協力して一月から開始した。

土地調査は、一年目のフィールド調査報告書を一月に完成し、二年目の計画を立てるが、外国援助・政府公共事業をめぐる土地問題の事例に焦点を当てて予定。(米倉)

LAOS

ラオス

自然農業と農村開発(ピエンチャン)

二年越して支援の要請があがっていたボンサワート村の井戸がようやく着工した。昨秋から本格的に村人たちと話しあいを始め、すでに給水施設を持っている村を視察することを通じて、給水施設の形態や、運営管理の方法について話しあってきた。現在、赤十字社とも情報交換をしながら井戸の建設をしている。乾期には一本の井戸で何とか乗りきっていた村人たちが

も、もうすぐ一年中きれいな水を得ることができるようになる。(川合)

森林保全と自然農業(カムアン)

十一月、森林土地委譲の実態を共有する会議が開かれ、委譲後問題が起こった場合、森林法で対処することが確認された。十二月には二期作が行なわれている三村を対象に、収穫量の実態把握、化学肥料の影響を知る研修を行なった。

ラオ村では農業実態調査を終え、村の問題点と解決方法を共有するワークショップを開催。問題点としては、井戸がない、家畜・家禽類が病気にかかりやすい、果樹園がないことなどがあげられた。貧困層の具体的な支援策につなげていく。(中村)

VIETNAM

ベトナム

ハノイ事務所

ベトナムにおける日本のNGO関係者とODA関係者が定期的に協議する「ODA大使館」の六回目の会合が十二月二十二日に開催された。外国のNGOが新規にベトナムでの活動を試みる場合に必要となるPACCOM(民間援助調整委員会)の承認を得る手続きが討議の中心と

なった。(西)

農村開発(ホアビン)

参加型農村開発の対象村の一つである、ホアビン省タンラック郡バクソン村の村づくり委員会、およびタンラック郡農業室スタッフと共に、中国との国境にあたるラオカイ省を訪問し、蜜柑や桃などの果樹を栽培している農家との経験交流会を実施した。ラオカイ省は生活状況が厳しいが、そうした中でも少数民族の人々が試行錯誤しながら果樹を栽培し、成功している姿を見てバクソン村の村づくり委員会メンバーは大変勇気づけられていた。(伊能)

自然資源管理(ソナラ)

住民自身による自然資源管理の活動を支援しているコマ村の中学校で、在校生徒を対象とした環境教育ワークショップを開催した。ベトナムでも「総合学習」が注目されつつある中、校長をはじめとする教員が企画段階から主体となり、「水の循環」をテーマにゲームやクイズなどのイベントを実施した。約二百名の生徒が参加したが、生徒たちにとっては、水や環境について遊びながら学ぶ初めての機会となった。(田村)

SOUTH AFRICA

南アフリカ

農村開発

南アフリカは過去百年で最悪といわれる干ばつに見舞われている。通常十一月～十二月に主食のメイズの作付けを行なうが、雨が降らずに作付けが遅れた。カラ地区の高地の村では、作付けが遅れると半年後の収穫時期には霜が降りメイズが収穫できなくなるため、作付けを断念した農家が多く出た。そういった中でも、環境保全型農業を実施し、微生物が活発に活動する土壌の畑では、干ばつの被害が少なく、メイズなどの生育も良い。化学肥料、農薬を多く投入する農業は、干ばつに弱い現状が明らかになっている。(津山)

子どもの教育支援

テボホ障害児ホームでは、ボランティアの山口が子どもたちへのトレーニングや教材づくりを、スタツフへの研修と平行して行なっている。また、短期ボランティアの永岡理学療法士がリハビリやマッサージについてスタツフに研修を行なった。

インクルレコ小中学校は、現地教育省と共同で進めていた校舍建設が終了し、十八教室が完成した。(津山)

調査研究・政策提言

日本のODAによる食糧増産援助に関し、代表の津山がスワジランド、レントへの政府現地調査団にオブザーバーとして同行した。未使用の農業機械などに関して報告した。(津山)

報告内容の詳細は、「食糧増産援助を問うネットワーク」のホームページを参照してください。
URL: <http://www.pawh-home.jp/kt2-net/>

《緊急対応》

IRAQ・JORDAN

イラク・ヨルダン

緊急支援

バグダッドのマンスール教育病院やセントラル教育病院など、ガン・白血病の小児病棟を持つ専門病院への薬品・機材の緊急支援を八月に開始。その後、現地の治安が悪化する中、調整員の原は隣国ヨルダンのアンマンに待機。この間、十二月上旬にアンマンで開かれたイラク小児ガン専門病院支援会議にオブザーバーとして参加。その機会に、同席したイラク人医師に支援の薬品・機材を渡した。

その後、十二月二十六日より一月十六日にかけて、原と中

島の二名でバグダッド入りし、小児ガン病棟への薬品、機材の支援を継続した。支援金額は八月から現在実行中のものも含め、四百万円強。

当初、病院への薬品・機材の支援は十一月頃までの期間限定の緊急対応の予定だったが、国営機関からの供給状況が一向に改善しないので、引き続き緊急対応を継続。今後、現地のNGOコミュニティを通じて保健省や占領軍当局などへの働きかけも検討していく予定。

また、子どもたちとの文化交流の場として戦前からたびたび訪れていたシンドバッド子どもクラブの復旧にめどがつくことになり、同クラブに図書や文具等を寄贈した。(原)

アフガニスタン

AFGHANISTAN

アフガニスタン

昨年十一月十六日に国連の外国人スタツフが殺害されて以来、JVCの事務所のある東部地域および南部では国連の活動はすべて停止している。米軍の大規模な軍事作戦が展開している地域では、特に治安が不安定になっている。NGOは可能な範囲で活動を継続している。

東部地域医療支援

地方クリニク／治安の悪化に伴い、クナール県でのクリニク支援を見合わせている。

カスクナール郡クリニクに緊急対応的な活動として、医療器材等の支援を始める。

女性医療従事者養成コース／ジャララバード市内にある保健省の女性医療従事者養成コースを支援する予定。

伝統産婆の職能向上訓練／周辺三県の五つの郡で約五十人の伝統産婆の訓練を支援し、出産介助のキットを配布している。

三カ所約四十人の伝統産婆のトレーニングを完了した。

シギ高等女学校支援

青空授業を強いられているナングルハル県シギ村女学校の校舎増設を支援する。建設完了までの間に必要なマットや椅子の支援を始めた。

地雷回避教育支援

昨年十二月をもって、第一期支援を終了した。

政策提言

連合軍による復興援助、今年選挙に向けての武装解除など、住民の平和に直接関わる課題に関して多方面から情報を集め、これをもとに他のNGOとも共同で提言活動を続けている。一月から、アフガニスタンに精通している中東の専門家が

PALESTINE

パレスチナ

幼稚園児栄養改善(ガザ)

昨年九月のプロジェクト開始時に実施された、幼稚園児約五百人に対する栄養調査の結果が出た。同時期に実施された類似の調査の結果よりは若干良いものの、栄養失調の割合は、急性で一〇・二%。慢性で三六・三%にも達する。慢性の男子の割合は四〇%にもなる。この分野での支援の必要性が確認される結果となった。

難民キャンプ平和図書館(ベツレヘム)

Beit Jibrin文化センターでは、十二月末よりボランティアの藪山彰が来訪。五日間に渡り子どもたちにマジックの披露、日本の絵本の紹介を実施。子どもたちからはアラブのドラムの叩き方を教わる。

センターの女性グループによる刺繍製品プロジェクトは、センターを訪れる外国人来訪者にも好評。少しずつ現地での発注も入っている。(小林)

リス・デニスを現地に派遣し、情報収集を図っている。(谷山)

多様な「個」とともに

〈在オランダ〉 栗原謙治

皆さまこんにちは。一昨年前までJVCエチオピア事業を担当していた栗原です。現在、オランダで久しぶりの学生生活を送っています。これまでの体験をもとに、貧困問題を解決できないのはなぜなのか、そもそも「貧困」とは何かということ学びながら、それに対して自分には何ができるのか、ということをもう一度問い直しています。

私の通っている学校は、世界各地で実際にこのような問題に取り組んでいる人たちが集まってきていて、学生の大半が途上国からの留学生です。授業と同様、いやそれ以上に同級生との意見交換から学ぶ



国内ひろば

JVC network

るのですが、故郷の惨状に居ても立っても居られず、仕事を辞めて昨年からのこの学校に通い始めました。本当はずぐにでもアフガニスタンに戻って、故郷のために何か活動をしたかったそうなのですが、まだ家族を説得し切れていないのと、今の自分には知識も技能もなく役に立てないのではとの思いで、まずは家族を説得しながら準備を進め、今年末の渡航を目指すことにしたそうです。

オランダでも、イラク報道に比べてアフガニスタンについての報道は今ではほとんど見られません。彼は、国際社会の目が次第にアフガニスタンから離れていっている状況を憂えていて、故郷に戻るのがたとえ一年後になったとしても、必ずその時に自分ができることがあるはずだと信じて、勉強しています。

一人一人の力は小さくても、その一人一人が共通の目標を持って行動を起こせば、大きな力にもなるのではないのでしょうか。私も今後役に立つるものをここで吸収していきたいと思っています。



国際協力カレンダー2004
“子どもたちのアフガニスタン”

約 24,000部!

おかげさまで大好評!

実力派カメラマンの写真で十二カ月がつづられる、JVC国際協力カレンダー。二〇〇四年度版『子どもたちのアフガニスタン』も大好評をいただき、当初制作した二万一千部は十二月中旬に完売。追

や発送の主役は、たくさんのボランティアさんです。「今日はバイトがないので来ました」「夕食の準備の時間までお手伝いするわね」「テストが終わったので来ちゃいました!」。主婦や学生、留学生などなど、毎日様々な顔ぶれが集まります。毎年、発送の忙しい時期に毎日手伝ってくださる会員の方もいらつしやいます。

忙しい作業の合間にふと嬉しくなるのが、注文用紙や入金の振込用紙に書かれているメッセージです。「毎年買いつづけて、もう十年目。家族の成長を見守ってくれています」「気持ちがあふれている時、カレンダーを見てふと笑顔になる自分を発見しました」「学習塾に飾っています。一年後、子どもたちのアフガニスタンに対するイメージがどう変わっているか楽しみです」。どんな方が買ってくださいったのか想像すると、こちらも暖かい気持ちになります。

カレンダーの収益金は、各地での支援に大切に役立てさせていただきます。今後ぜひご期待ください。

加制作分も加えると二万四千部近くのカレンダーを販売することができました。お買い上げいただいた皆さまに、この場を借りて心より御礼申し上げます。

例年以上の注文をいただいた分、発送作業も大忙し。梱包

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。

① JVC 募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

11月計 **3,543,365 円**

12月計 **2,998,886 円**

	11月	12月
無指定	381,531 円	398,573 円
タイ	0 円	1,100,000 円
カンボジア	0 円	3,500 円
ラオス	11,000 円	1,000 円
ベトナム	71,960 円	112,200 円
南アフリカ	50,000 円	50,000 円
パレスチナ	6,000 円	14,000 円
アフガニスタン	1,108,051 円	454,320 円
北朝鮮	12,000 円	25,000 円
イラク	1,902,823 円	840,293 円

② 犬養道子「みどり一本」募金

この募金は JVC 活動地での植林プロジェクトに使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

11月計 **269,500 円 / 34 名**

12月計 **492,446 円 / 60 名**

③ JVC サポート募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としやクレジットカードを利用する手軽な募金方法です。

11月計 **111,000 円 / 73 名**

12月計 **101,000 円 / 72 名**

編集後記

パレスチナではイスラエル軍のために不自由な思いをしている妊産婦さんにお産キットを配布したり、イラクでは白血病や小児ガンの子どもたちに医薬品を送ったり。自分に子どもができて、改めてこれらの活動の大切さを痛感しました。

3月末に出産退職します。会社員からボランティア、インターン、スタッフへ。気づけば6年近く JVC にお世話に。会員やボランティアのみなさんに支えられてここまで来ました。ありがとうございました。(郁)

第5回 JVC 会員総会を開催します。

JVC 会員総会は、前年度活動報告と今年度活動計画を JVC スタッフが説明し、これを会員の皆さまに承認していただく重要な場です。ぜひご参加ください。また、JVC スタッフと会員の皆さまとの交流の場である「JVC のつどい」も、同日に開催予定です。

日付：2004年6月12日(土)

場所：東京都内(未定)

イラクの子どもたちの絵がいっぱい!



JVCは、昨年の戦争前からイラクに入り、子どもたちを支援してきました。同時に、行く先々で出会った子どもたちに、夢や自画像を描いてもらってきました。

絵を描くことで、自分を見つめる。それが生きる希望につながればと願っています。

絵本『おにいちゃん、死んじゃった』

子どもたちに描いてもらった絵が絵本になりました。家族を亡くした子、家を失った子…。ですが、その子どもたちが描いた絵には生命感があふれています。詩人の谷川俊太郎さんが詩とメッセージを添えました。全国の書店で発売中です。



詩：谷川俊太郎 絵：イラクの子どもたち
協力：日本国際ボランティアセンター (JVC)
出版：教育画劇 価格：1,000 円＋税

内容に関するお問い合わせ：教育画劇 松田さん TEL:03-3341-1458

絵画展『イラク戦争と子どもたち ~子どもたちの絵画展~』

2月、子どもたちの絵の原画を展示する絵画展を開催しています。

日時：2月1日(日)～29日(日)

場所：クレヨンハウス東京店(東京・地下鉄表参道駅より徒歩3分)

4月より会員担当が から に交代します。

「会員担当」とは、JVCへの入退会のお申し込みや、会員の皆さまの情報のメンテナンス(住所変更など)、会費などのお問い合わせに対応する役割です。また、「こんな会員サービスがあったらいいのに！」などのご意見も随時お待ちしております。4月以降のご連絡は細野宛でお願いいたします。

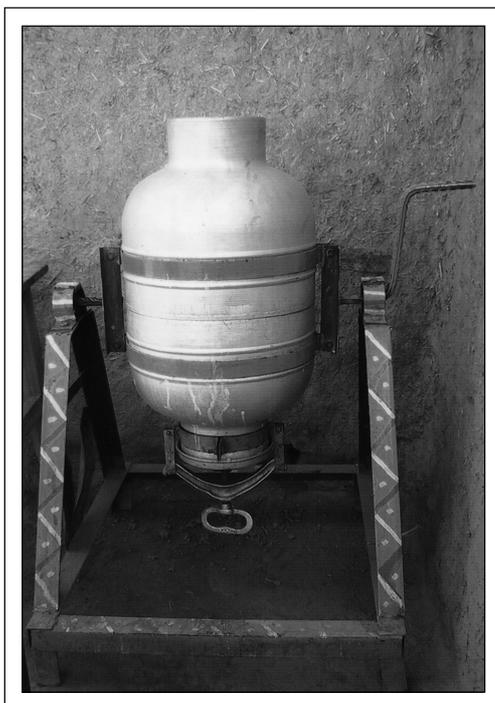
中山からのお別れの一言は、
おとないの編集後記でどうぞ!

暮らしを彩る道具

LIFEWORk ITEMS

67

Afghanistan



バターをつくる

牛乳を入れ、ヨーグルトを1さじ足して、一晩寝かす。
ハンドルで1時間ほどまわすと、手づくりバターの出来あがり。
(アフガニスタンにて)



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人々に協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年7回この会報をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
 - ◎学生会員 5,000円
 - ◎団体会員 30,000円
- ※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などはこちら (会員担当) へ。

hosono@jca.apc.org

会員数 (2月4日現在) 合計 1469人
(正会員 590人 賛助会員 879人)

■ オリエンテーション(説明会)へどうぞ。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料・予約不要です)

- 第1月曜日 午後7:00 - 8:30
 - 第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30
- ※会場はJVC東京事務所です。

■ E-mail

jvc@jca.apc.org

■ URL (ホームページ)

http://www1.jca.apc.org/jvc/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。